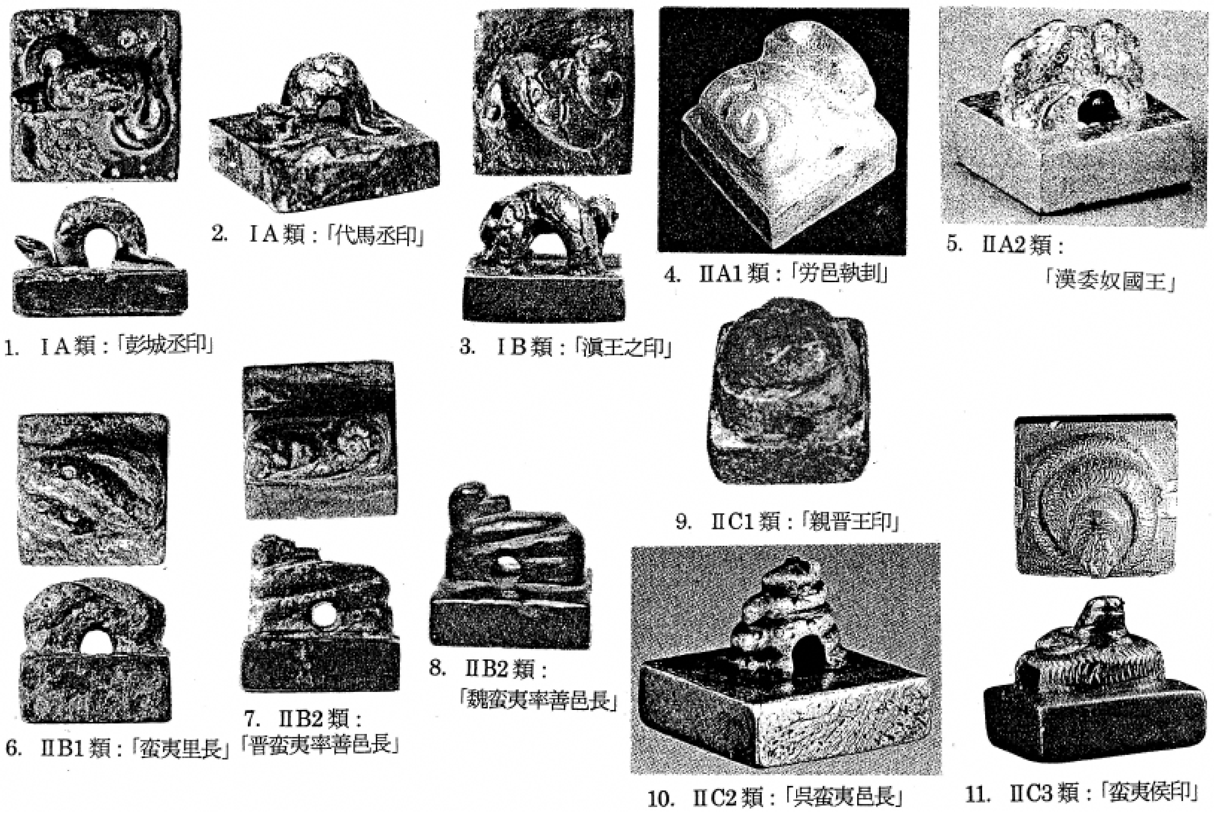

図４　蛇鈕類型の代表例

表３　蛇鈕各類型の時期別例数

類型		戦国	秦	前漢	新	後漢	魏	晋
Ⅰ	A	1	13	5				
	B			1				
Ⅱ	A1			1				
	A2					1		
	B1					2		
	B2					1	3	9
	C1						1	1
	C2						1	
	C3							1

唯一の実例で，駝鈕の再加工品である。駝鈕の再加工は加藤慈雨楼氏が気づき（加藤 1986a），大塚氏が詳細な検討を行った。公表された再加工品５例を図５に示した。後漢代「漢匈奴姑塗黒臺耆」（1）と魏代「魏率善羌佰長」（3）は駝鈕の原形をよく留める。後漢代「漢匈奴帰義親漢君」（2）や晋代「晋率善叟仟長」（5）は原形が大きく変えられている。駝鈕再加工例は後漢代から魏晋代にわたる。また，蛇鈕印の類型化とその変遷から判断すると，「漢委奴國王」金印は後漢代の「漢匈奴姑塗黒臺耆」よりも蛇体の曲率が強く前漢代の「労邑執刲」に似ることを重視すれば後漢代でも早い段階という判断が妥当である。

こうして蛇鈕印の類型変遷が整理できると，「漢委奴國王」金印で蛇の頭部が後方に屈折反転する点も考察できる。前漢中～後期のⅠB類とⅡA1類ですでに頭部が反転している。そして，漢代には龍や動物の頭部が反転する図像が多数みられる。駱駝の頭～頸部を取り去ったから頭部が反転する形になったのではなく，駝鈕の頸を取り去っても当時の図像形式を逸脱しないから，このような形態に再加工されたと解釈できる。

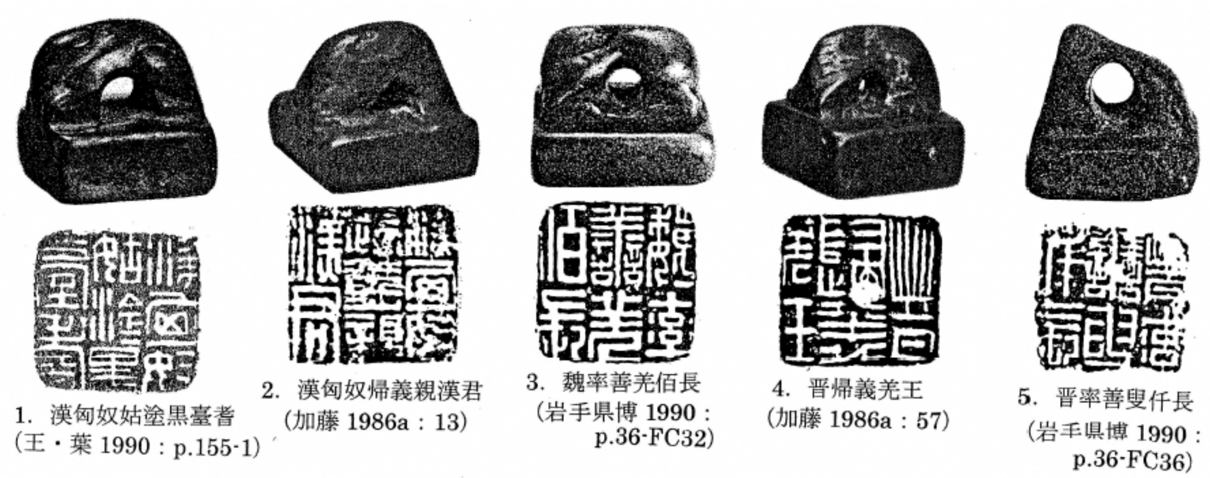

図５　駝鈕の再加工印

５.「漢委奴國王」字形の検討

最後に,「漢委奴國王」金印の印面に刻された５字の風格・字形細部の特徴から，どのように時期判断ができるかを検討する。なお，各印の時期判定は主に孫慰祖氏（孫 1993）に依っている。古印の時期を知るのは，①：墓地で共伴する副葬品の時期によるもの，②：秦や王莽代をはじめ制度の変更によって地名や官職名が改められので時期を絞れるものがある，③:①と②をもとに文字の特徴を比較検討する，という方法による。

まず「漢委奴國王」金印（図６下段：後漢前期-下）の「漢」字は,「氵」＝「水」字形に時期的な特徴がある。この金印では，縦線５条が直線のように見えるが，詳しく見ると縦線の上部がわずかに左に曲がる。さらに左上の縦短線の下端が逆「L」字形に折れる。両漢代の「水」字形の変遷（図６上段）を見ると，前漢中期（「西河馬丞」・「石洛侯印」，下段「汝南尉印」，図７「滇王之印」・「菑川王璽」）では，縦線の曲がりは上部が強く下部が緩い。それが前漢後期（「廣漢大将軍章」・「卑梁國丞」，下段「汝南尉印」，図７「淮陽王璽」）から王莽代（「漢氏文園章」・「漢氏成園丞印」）へと直線化が進行し，後漢代の多く（「梁厩丞印」・「漢匈奴破虜長」・「漢叟邑長」）は直線となるが，後漢前期に曲線的傾向がわずかに残る（「泥陽尉印」，図７下段「楽浪大守掾王光之印」）。また,「水」字左上の縦線は前漢代では右上よりも強く屈曲していた（「西河馬丞」）のが，前漢後期から王莽代へと全体に直線化が進むことによって，左上縦線のみが逆「L」字形となったもので，王莽代に多い（「漢氏文園章」）。したがってこの金印の「水」形は，王莽代～後漢前期に限定できる。

「委奴」２字を構成する「女」部は，両漢代の変化が緩やかであるため，時期の判別がもっとも難しい。図６下段の下列に「女」字の下部が「己」を呈するもの，上列に「女」字の下部が緩やかな「S」字形を呈するものを配列した。そして「己」形を詳細に観察すると,「己」形上半の「コ」部と下半の「㇗」部の縦幅は，前漢代では下半が幅広かった（「汝南尉印」２点）のが後漢代になると上下がほぼ同じ縦幅となる（「長安市長」)。同じことが，緩やかな「S」字形を呈する系列でも確認できる。この金印は,「奴」字の上半「コ」部が下半「㇗」部よりも縦幅が広いのに対して,「委」字の「女」部は上下がほぼ等しい。「奴」字に前漢代の特徴を留めながら,「委」字に後漢代の特徴がみえる。また，この金印の「委奴」２字の「女」部の「己」形左側に垂下する縦線がともに緩い曲線を描く特徴は前漢～王莽代に共通する。後漢代になると直線傾向が強くなる。さらに,「女」字の上部の横「日」字形の上部横線が,「委」字では前漢

図６　「氵」・「漢」（上）と「女」（下）の時期別比較（孫 1993 より作成）

的な曲線を描くのに，「奴」字では後漢代に顕著な直線となっている。このように，「女」字も前漢から後漢代への過渡的な特徴を確認できる。

「國」字は両漢代で明瞭に異なる。「國」字の「戈」部の第４画が，前漢代では横「L」字形なのが，後漢代になると「一」字形になると，王人聰・葉其峯両氏が指摘する（王・葉 1990）。しかし，第１・３画も明瞭に異なり，第 1 画は前漢代では右下がりなのが後漢代では水平になり，第 3 画も前漢代は曲線的なのが後漢代になると屈曲が強くなる（図 7 上段）。そこでこの金印の「國」の「戈」部を見ると，第１画は直線的だがわずかに右下がりとなり，第 3 画は緩い曲線（彫り方は後漢方式），第 4 画は横「L」字形となる。第１画の特徴と第 3 画の彫り方に後漢代の特徴が表れ，第 3・4 画は前漢的でもあって，過渡的な特徴だと分かる。

最後に，「王」字は両漢代で明瞭な違いがあることはよく知られている（図 6 下段）。「王」字を構成する 3 条の横線の中央が，前漢代では上方にある（「滇王之印」・「菑川王璽」・「淮陽王璽」・「東平王印」）が，後漢代では中央にくる（「廣陵王璽」，下段「楽浪大守掾王光之印」・「四角王印」・「汪陶長印」)。「漢委奴國王」金印の「王」字の場合は，ほぼ中央にあって後漢的である。ところが，3 条の横線の上下の縁

図７　「國」（上）と「王」の時期別比較（孫 1993 より作成）

線がわずかに曲線的な特徴をもっている。この特徴は，前漢後期～後漢前期の「左奉翊掾王訢印」銅印や後漢前期の「廣陵王璽」金印・「楽浪大守掾王光之印」木印にもみられる。前漢代の「王」字の横線は直線が多いものの，前漢代は各種の文字の横線が緩い曲線を描く特徴が「王」字に反映されたものと考えられる。「王」字もまた，前漢代から後漢代への過渡的特徴を備えていることが分かる。

以上のように，「漢委奴國王」5 字の特徴を詳細に検討すると，驚くべきことに，5 字すべてが前漢代から後漢代への過渡的特徴を確認することができる。そして 5 字ともそれぞれ一部に後漢代の特徴を備えていることから，この金印の文字は後漢初期に限定できることになる。

なお，以上の検討で用いた資料のうち，墓地の共伴遺物によって詳細な時期判断ができるのは少数であり，多くの資料は出土情報が分からない。それを理由に，上記の判断を疑問視する向きもあろう。しかしそれには，「漢委奴國王」金印を約四半世紀遡る王莽代（AD8-23 年）の資料との比較によってその疑問は払拭できる。2009 年に西安北郊の廬家口村で発見された封泥群である（馬 2016）。図７に，「氵」＝

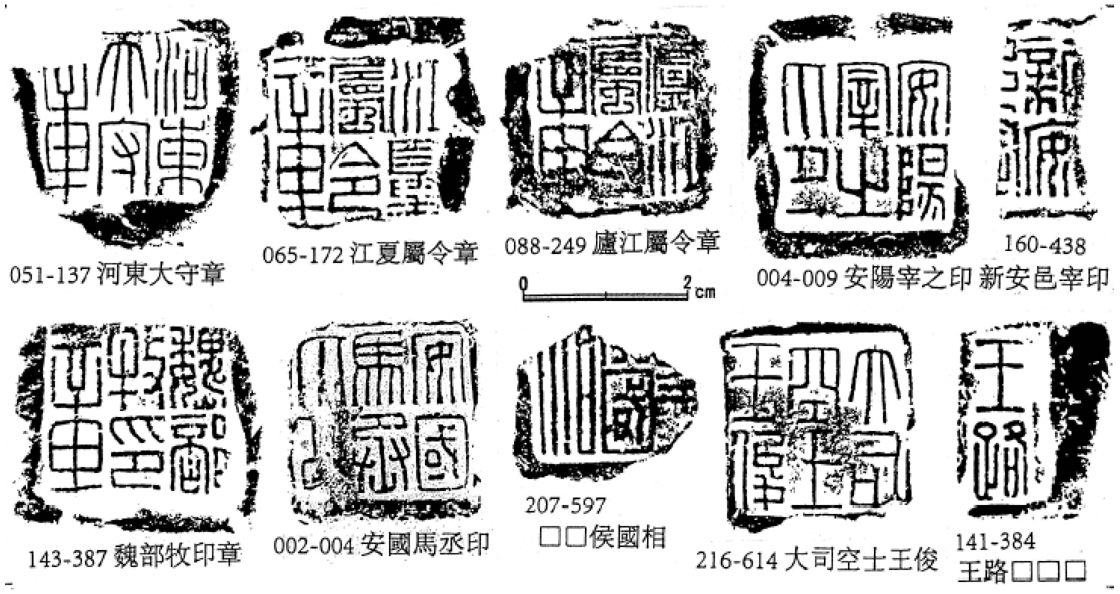

図８　王莽代の「氵」・「女」・「國」・「王」（馬 2016 より抜粋）

「水」，「女」，「國」，「王」字の代表例を抜粋した。「氵」＝「水」字３点（「河東大守章」・「江夏屬令章」・「盧江屬令章」）は，上部の屈曲が強く，この金印よりも古い傾向が明瞭である。「女」字は，「女」下部が「己」形を呈する「魏」字（「魏部牧印章」）では「己」上半部は幅狭い。緩い「S」字形をなす「安」字３点（「安陽宰之印」・「新安邑宰印」・「安國馬丞印」）は「S」字の上部が小さい。ともに金印よりも古い特徴である。「國」字２点（「安國馬丞印」・「□□侯國相」）の第１・３・４画は，「漢委奴國王」金印に酷似する。２点例示した「王」（「大司空士王」・「王路□□□」）は，中央の横線がやや上位にあり，「漢委奴國王」金印よりも古い特徴がある。このように，わずか約四半世紀しか時期差のない王莽代封泥群と「漢委奴國王」金印との間には，きわめて近似する特徴がありながら，詳細を点検すると明確な違いを認めることができる。これら王莽代封泥群は，「漢委奴國王」金印の文字が後漢代初期の特徴をもつことをはっきりと私たちに教えてくれる，きわめて重要な資料である。

わずか一辺約 2.35 cmの印面にこのように細かな篆刻が可能なのかと疑問視する向きがあるかもしれない。しかし，この金印の印面の詳細写真を見れば一目瞭然で，例えば「氵」部では，わずかに曲線的な上部では刀（たがね）は細かく操作され，直線的な下部は滑らかに彫り込まれている。

６．鈕孔内の特徴

本田浩二郎氏が，この金印の鈕孔は，内部が下方の印台側と上部の鈕側に大きく窪んだ球形を呈することを指摘した（本田 2016）。一昨年私は，AD58 年製とされる廣陵王璽をじかに観察する機会を得て，印台側が球状２段に窪む特徴が「漢委奴國王」金印と酷似することを確認した。さらに，金印や銅印諸例の鈕孔を観察して，前漢代から後漢代を経て魏晋代へとこの鈕孔内の窪みの形状とその作出法に変化があり，魏晋代では鈕孔の左右（や前）から鏨で斜めに彫り込む手法が主流になることも把握できた。江戸時代に，古代の鈕形態が分かるのは顧従徳『集古印譜』の略図にほぼ限られており，そこに鈕孔内部の形状は描かれていない。江戸時代に「漢委奴國王」金印のような鈕孔の存在を知り，復原することは不可能である。

７．結論

以上，「漢委奴國王」金印という１点の実物資料を，印面の文字細部の特徴，金属組成・尺度・鈕形・鈕孔の観点から検討を行った。印面の 5 文字はすべて後漢初期の特徴をもち，金属組成・尺度・鈕形の検討結果とも相互に何ら矛盾はない。したがって，この金印が後漢初期の製品であり，なおかつ江戸時代に製作することは不可能であると私は断定する。今から 1961 年前，現在の日本列島に住んでいた倭人の中の最有力者が，漢の光武帝と直接交渉したことを実証するきわめて重要な資料であることをあらためて強調したい。

（なお，本稿は，2018 年 1 月 21 日に福岡市博物館主催＜シンポジウム「漢委奴国王」金印を語る　～真贋論争公開討論～＞での同名論題の講演レジュメに補記したものである。）

【主要参考文献：邦文】(五十音順)

石川日出志 2015「「漢委奴國王」金印と漢代尺・金属組成の問題」『考古学集刊』第 11 号，pp. 93-103

岩田重雄 1979「中国における尺度の変化」『計量史研究』第 1 巻第 2 号，pp. 1 - 37

岩手県立博物館（編・発行）1990『太田孝太郎コレクション 中国古印』

大谷光男 1974『研究史 金印』 吉川弘文館

大塚紀宜 2008「中国古代印章に見られる駝鈕・馬鈕の形態について」『福岡市博物館研究紀要』第 18 号，pp. 84(1) - 71(14)

大塚紀宜 2009「マイクロスコープによる金印の表面観察とその検討」」『福岡市博物館研究紀要』第 19 号，pp. 84(1) - 63(22)

大塚紀宜 2015「金印の詳細観察と中国古代印章との比較－特に駝鈕印についてー」『古代学研究紀要』第 23 号，明治大学古代学研究所，pp. 135-143

大庭　脩 1971『親魏倭王』学生社

岡崎　敬 1968「「漢委奴國王」金印の測定」『史淵』第 100 輯（九州大学文学部考古学研究室 1975『志賀島』pp. 84-92

大谷光男 1974『研究史 金印』 吉川弘文館

加藤慈雨楼 1986a『漢魏晋蕃夷印彙例』丹波屋

加藤慈雨楼 1986b『漢魏六朝蕃夷印譜』丹波屋

金子修一 2001『隋唐の国際秩序と東アジア』名著刊行会

榧本杜人・中村春寿 1975『楽浪漢墓第 2 冊 石厳里第 219 号墓発掘調査報告』楽浪漢墓刊行会

狩谷棭斎 1835『本朝度量権衡攷』(冨谷至校注 1991・92 東洋文庫 537・546，平凡社)

神田喜一郎・田中親美（監修）1968『書道全集 別巻 1 印譜中國』平凡社

鈴木　勉 2004『ものづくりと日本文化』橿原考古学研究所附属博物館選書(1)

鈴木　勉 2010『「漢委奴國王」金印・誕生時空論』雄山閣出版

菅原石廬 2004『鴨雄緑齋蔵中國古璽印精選』アートライフ社

高倉洋彰 1995『金印国家群の時代』AOKI　LIBRARY，青木書店

高倉洋彰 2008「漢の印制からみた『漢委奴國王』蛇鈕金印」『國華』第 1341 號，pp. 5 - 15・巻頭図版

竹田淳照（編）1964『中国古印圖録』大谷大学

名古屋市博物館 1989『中華人民共和国南京博物院名宝展』毎日新聞社

西山要一 2003「象嵌―古墳時代の金工技術（2）―」『考古資料大観』第 7 巻，小学館，pp. 359-362

早川泰弘・三浦定俊・大森信宏・青木繁夫・今泉泰之 2003「埼玉稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣の金象嵌銘文の蛍光Ｘ線分析」

『分析科学』第 42 号，pp. 1-17
本田浩二郎 2016「国宝金印「漢委奴国王」の鈕孔に関する視点」『福岡市博物館研究紀要』第 25 号，pp. 66(1) - 61(6)
本田光子・井上充・坂田浩 1990「金印その他の蛍光X線分析」『研究報告』第 14 集，福岡市立歴史資料館（大谷 1994，pp. 286-295）
三浦佑之 2006『金印偽造事件』幻冬舎新書 015
【ハングル】（発行年順）
朝鮮遺跡遺物図鑑編輯委員会 1989『朝鮮遺跡遺物図鑑（2）古朝鮮・扶余・辰国篇』
湖厳美術館 1997『湖厳美術館所蔵 金東鉉蒐集文化財』
韓國國立民俗博物館 1987『韓国の印章』（和訳版：1989 年，学生社）
【中文】（発行年順）
顧従徳（編）1575（初版 1572）『集古印譜』（吉林出版有限責任公司 2010 年版）
雲南省博物館 1959『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』文物出版社
羅福頤 1982『故宮博物院蔵古璽印選』文物出版社
羅福頤（主編）1987『秦漢南北朝官印徴存』文物出版社
王人聰・葉其峯 1990『秦漢魏晋南北朝官印研究』香港中文大學文物館
孫慰祖 1993『両漢官印匯考』上海書画出版社
青海省文物考古研究所 1993『上孫家寨漢晋墓』文物出版社
孫慰祖 1995「古印中所見的蛇」（1999『孫慰祖論印文稿』pp. 144-145）
葉其峰（編）1997『古璽印与古璽印鑑定』文物出版社
荘新興・茅子良 1999『中國璽印篆刻全集 1 璽印・上』上海書画出版社
孫慰祖 1999『孫慰祖論印文稿』上海書店出版社
陳松長 2004『湖南古代璽印』上海辞書出版社
賀雲翺（主編）2006『中国金銀器鑑賞図典』中国文物鑑賞大系，上海辞書出版社
方斌 2008（主編）2008 『故宮収蔵 你應概知道的 200 件 官印』紫禁城出版社
浙江省博物館 2009『浙江省博物館典蔵大系 方寸乾坤』浙江省古籍出版社
孫慰祖 2010a『歴代璽印 断代標準品図鑑』吉林美術出版社
孫慰祖 2010b『中国印章 歴史与芸術』外文出版社
羅福頤（羅随祖主編）2010『古璽印考略』紫禁城出版社
呂章申（主編）2011『中国国家博物館』長征出版社
丘光明 2012『中国古代計量史』安徽科学技術出版社
呉硯君（編著）2012『盛世璽印録』藝文書院（京都）
肖明華 2015『雲南古代官印集釋』文物出版社
馬驥 2016『新出王莽封泥選』西泠印社・中國印學博物館，
許雄志 2017『鑒印山房新獲古璽印選』河南美術出版社